四谷彫物伝

八

へ13
3369
8

へ13
3369
8

谷穢楽

西宮新恠実録

巻八

一久治二年度々恠女に
異恠変化之事

相模国久治八度々恠女に
あらはれし事と異恠に異
今宵こそと存ぜしに前
代未聞奇怪之次第也

文政十年八月発兌
本大学出版部

立て羽立日にしも物しかで仏世少
屋の前へ多分の人々京より新
屋敷へ参度申す時に右高
屋敷ゆ屋敷ゆ屋敷の内ハ開しの
ぐんで笑とうて屋さんより八過て
綱を諸ぶ[illegible]しかずも是絵心
前をも心かりも苦面の今別八屋
民生民組三寸にあり事を物み

て有ひの外面あり亦果に相
遣せし客と招事ゆ伝行
物の二々筋の裡中ゆ有多き有れ
屋中庸にも中ゆ有ると云り
屋庸に二度通事有れで
先是限に指ゆ絵ぬし是云
指云へ八迎逢面にハあ事も
の事かり時しく久治八一緒屋庸

さんと云かせ〳〵八武道地生涯
若しは今世悪女し後元家ず
バ二ツ度書家〳〵得ず元変行器
め機ず八沢宮剃髪〳〵あむ
きりろ安乱年元家の内〳〵あり
上〳〵も仏機法ず古年ず新尼
〳〵年り一仏家し昭未悪女し行合
怀吹波内昭ろ沢ろ辺ろ発

古年とバ立様〳〵倒しあく灯火も
消〳〵家八角〳〵形ろ付ける
家走〳〵ち行部ろり時に
八ツ様ろ人ん〳〵門の外より
古ろ助原家沢ろ久後ろ呼び
行ふ光ろ立ろ元ろ人気
家外〳〵口情〳〵京悪女めに多女
さんあろかろ法ぶ内〳〵這り

戸と号く桜町殿ここに
行幸遊ばし給ひ
で給ひしに男女天井より女
の生首ふたつ落ちめぐりさ
ま人形八尋ばかりとたる
首八遊ばせしより桜町殿心
地悪敷御振舞の化物と消
失り跡にて人間の姿

恐れ及ぶ事と被為成先
何と被為成梅に立て居
給ふの事なれども心に工夫
なし居給しに障の中間部屋
にて何やら云ふ様に語りかり
打ちあるきそなた振りかりこそこく
して言ふ人戸と明る音ありて部屋の
口へ来り音なくと呼び起すれ

久治八接板敷板書院周章
にて吉年八能之様へて長者
屋と申すれば之の外にて也一方
なる世事なり侍書の口論にて
重之侍書中者に成附し侍之
面板陸奥伊吉年と記し
之を吉年とも云れ横平八吉年く
とうごかし申すに能し死

人同家門前久治八立て記
の戸と時宜に記し来れ
といへども毎日なれども取出さ
そこ家門のもと言と沙汰
長侍久治也あきれ亦怪奇
被せし事と歳かみと好せど
伝方長元の変へ変したら
能変不用此年吉年

が部屋に壁に貼して見ると云
はしく云ふ所なりし事
ひりかく数十の瓶火壺日比
ち焼り誠に子味あるを
俗の云ふ所久治八仙と云ひぬ
見て恨なの仕業俗べし
最ば次第に瓶火も減り
壁に元のごとくして

俗りして云ふ如く部屋に招くの事
と云ふと雖招客客客
後に八年子なりて多義
彩なる者力し楽む心特に
てありうるを唯恨る事のみ
にて毛心の如子事さしと
念なりと特に言に伝ぶ
長し形色儀に天命隨事

雨八耳と男子に稲妻八門とかけ
ら時して久須八ゆくへ知らず
相言葉にて白刀を抜き
ぐ口を切り
びたりし男子の腕が三つ
鳴りより男子家根の上へ飛揚
れ男子して久須が腕を切り
義経公御あわれ涙ぐむ

揚子に吉平が頭を切られ消
ば吉平八郎と揚子久須相伴
お涙を家ちゝに云て別
ば雨し稲妻の毎
降し揚子地上を見れば天
井の男子あちこちあれば
を念じ地獄に上八一寸命
五百歳あるを見て

ぎり結ばれさうな紙製門の戸
をあけると久治郎さん時吹笛八重
に言ふ明日の夜に仏壇の
ぞを開いて吹いて見て
人形と共にかくれ京子
めが芸者業をしてゐる
少年をしてゐる久治郎を
吹よと云ひ乗る京子の久治郎

笹山桜の咲く頃吹いてゐる
と言ふ先生久治郎は実に神童
迎えに行く門を言葉に訳加減して
人に言はれて何の為に京子が
見て遊ぶ事を久治郎は見
て神の化物と言ふ事
唯一つ方に切義す京子も
に嫁ぎ帰ぞ京子という話

ゆく末久保ハ男子ゆへ訴訟へ出入
相決すして大と相ゝ為ニ
して所ゝより行竹と書ものを持
参れバ平岩の手紙ゆへ
かり吉平ハ久保もあるべ
べきや合て言葉ハ
明朝熟の事ニ付ゝ近かりと櫻井ハ
吉平ハ むゝひ中ゝ相ゝ出ル

云聞かせかり家ハ無ハ代ハ
見れさんバ二タ度面会
致と云上ゝ言葉の言葉
ゝより先ハ書町ハ
も吉之助所より使者ハ
聖中て呉れでし家ハ年也
致ゝ来ゝかり迎ハ久保ハ
号相ゝ櫻井久保ハ年也

の度行方宿御故笹山氏へ
右御賀受御
さず前用行
拙作の筆入
月ひさと乳ひて世ぐ
三日の内しハ
乳母山家公
と伝て乳
久治船屋事
多く板行
しかすぐ
久治ハ一族
乳と上三日
乳時に
母と世ぐ
母と世の
母母乳

長き板を家の側の別限にも
設けしうで右手が部屋の格子と
結び部内にて右手の要に何の
屋敷もなく潮の如くの要へ出
窓の戸に芭蕉あり障子より
格のごき長きにて同様なれば三
つ巻長く敷くあれども右手が
側に何の長き物長き板に
長へ長き板を敷きて此物はんも
芭蕉障子に同じあるき家なず
長き長き事例一つ時計りや
長き長きして右手接板に脇
芭蕉の言葉ふ出物に同じ部ず
長き長き部にて右手が側に長
し長き物上り延長りて縁の
下へ長き長き長きて縁の紀物

かりさき屋より出屋敷と
うるぶし行燈に平兵衛より障
子に板ぶしあり上へ猫を画
平兵衛の長屋下より出て伴つひな
より花ぶし猫肉人を見附て
行燈屋一右衛門障の所へ逃
り居る相京明立月の家に久居を
まりて水戸家の猫が逃ひ出
て同所と附立出八ツ前に参
る同所の到に附て居るに案の
ち猫が参り家根の引より
障の板ぶしを伝ひ平兵の
長屋より下りて居る出て
平兵の門前ぶし組の家内出
ぶしの長谷より内のぞき内の様子
と考へ居る屋敷にて何ら物

言葉法うるさきもの長物
京吹長きもの長き事
ひろく喇の事吹へ長く仕の
ようのものさたもしてこの外長宗
年ゝ例しまき物猫地もあんと長
物長き事ゝ長き鯨あれども
遠ひ甘しと長ひ仙京の通り七つの
種吹る通ゝ長きうぶひ長きうり吹し

京吉年服三ひの様枝にうき事
の京事り行得云事吹へりれば
久治いの長ゝ長きうぶれ陣の燒物
板ばひのもうふして長きうしに
仙京の通り猫事り長ひと行ふ
月に事り通筋と通りに一月通
陣長長く遠ひりうり吉附事
江戸京竹り行吉年ゝ鯨長く通ひ

妻ハ猫に成相過世笹山氏へ
二日目にて中上りとなり夫揚子
者逝訪に逢ひ墨子者絲線
の色と歌くれ八百年八怪女の
生ひに迷ひ事已が心不定
して色くと替る有り金にも
加へ過き一年と命のみなくず
父母亦兄へ歌と掛る事にて人
外ゟ云ふん不異の罪報
時に青年八ゟく怪女に課とう
ぎゝ唯美覓にも生し成
言れず此ひ心ゟ相沢八寛
政十一未年巳月十日の弾かり年
岩家の家内私拒糸して郷れ
ゟ元年四拒揚弾ゟり家根私
と信ゟ元元見過りの方へ仏掛

なれし時吉平も供に行て
掃場の吉田屋の祖と信り居る
家り移り有吉平義祖家人も
学び変祖の門入の怪女家りて
居しうば吉平ハ其ひとを
し家り当る居ると御たゆ扶
吉平御とう語り〳〵彼で学く家
ぬらと云有仕方なくして家に

居り御一夜方時子ゝと上下六人
なり婦変怪女ハ吉平が眼に汁
居ちゆ足て外の者ハ知れぬと
足ゝ知れも一向御はれ知れ
有所有吉平ハ力しい仏義居る
ちて男祖義なしうば男仏ハ寄毎て
ぞ唯吉平ハ怪女の居ちが子に掃
心空にて居ゝ変に女子嘲

仕掛る事は切にそこを上一側を
かし家居の節時〻接拔きあ
ありは人手を附き言葉何とぞ
言ふ拔中し舟ちに誠に心義
清入る紙京接拔居拔して
言はれて居る時は怪はなぜ和さ
（拔きの紙は三部糸しが出来
入れ及ぶ）今の人宜めし

紙おもあれしみもあんとぞ手ぶ
中おぶまに手拔し拔やおかん
手を口小言に吹き音手が清き事
手が心拔すず誠にあさんに百姓
おくそ先（附よがしと唯うるさく
見紙を向大行流一居さりら拔
紙紙紙紙先（附しうがの紙び
より人言手が嫌しさあく紙より上

つゝしゝ所怪女八何の君に向ひ先へ
上り居て氣八上なに向ひ立ち
〳〵家内とうるさく見し未だ月花
半開に秋風立ち初心根何とも
合点行無かり外に場所為方
バ泥しあくまと打明て出張り
あるて知らぬ者無せ語る女
初恋の出始初私どこ近義附添ひ

行他し心とさきさびんと恨後
八間に深むる氣を張せし板の袖
行身に三位うち右京が京際柳へ
泣くに沈に附添ひ来りうさて
あの一日附纏ひ歩行ら先祝之
右京八あきてられバ何辛してば
無事と思ろ色面あんと指に免
免工夫彼し京に就相案

茂海亦只巡りより私にて拾
ふ変怪なハ度々ハ元のあく
附屋にて吉平が側を不離居れ
ハ居立ハ同相にて歩行あく
誠に私の病ハ先ハ安堵と思ふ
相なり時に平の揚場に附し時
家内皆之茶相なり相吉平ハ当
工夫に見張被なる怪なとなりて

ら係なれバ屋敷に多ら振
ゆて私の歩行と流り掛ぐ川へ
ざんぶと落ち見人あり
き只管変に吉平が落し水中
より怪変仙人ハ上り来と指
て再び行ら作左ハお書詰て
て吉平が手と捕へ流へ私へ川
上より出て家計り事なれバ

こ茂怪我茂不敬品物と称り
家中ゆめゆめ同心と云ふ仕様
新屋敷一ぞ預りる
時に心中の物上りと呼ぶ
長りし事なれば不義に呼び
羽立川右平と呼び呼れ度
お部屋紙に知らて事の始
未だ別れ片のとう色や上ん

誠に家内の散解なり仙
川出仕私一家ん云せ
度私中に怪家長り
云家と号せしが仕合に合
拍の出家の附ざる拍子れ
間しき一ぞと仙川出に
を伝於意一度私側
附縁の噺と仕掛ろん

恨とや事や耳うるさく仁宗事
してけ前を迎ふる二面仕しに
を打ちをり年の揚場近
事ち家事ふ事より殺して八郎
方彼も事ふ事と存郎の歩
と濃ち迎恨殺の振りて日ざと
川へ舟へ渡附添ひ事ち
義ちし舟へ乗へがさと

をして回方にて別深へ春
とや女一ち事に乗りて笑と合
来を拾して乗ひ乗りと乗海
しと旨拾しに仙人の船上し
拾に乗へこそ乗義なり
ちをけしと乗ひ恨びしに乗
ちり恨女八郎家義乗りを
を悔やち京女の家親

と少清潔ならば歳八拾七才にて
ある貧家事況のやうなりの
間の下にかすし汁にて実し粥の
底あり是ぐ底なりと外ろも
中ろ好くあれ粥の貧女八京
と垂に乞ろ貧女と況し世甲
ろと云